

## 大須賀筠軒と瀧川君山との交遊

— 忘れられた日本近代文学 —

池澤一郎

## はじめに

大須賀筠軒は、磐城平の人で、神林復所の次男である。名は履。

字は子泰。通称次郎。別号に鷗渚、舟門。昌平黌で同郷の先輩である安積良斎に師事した。江戸から帰郷の後、平藩の藩校佑賢堂の頭取となった碩学鴻儒である。天保十二年(一八四一)生まれで、大正元年(一九一二)に没した。詩文書画も能くした。維新後は福島師範学校、第二高等学校(現東北大学)で教鞭を執った。

瀧川君山は、第二高等学校で、筠軒と同僚であった一時期があり、以来筠軒が木に就くまで交わりを訂した。君山は出雲国島根郡土族瀧川空之丞の長男。東京大学古典講習科卒。第二高等学校教授。後に大東文化学院教授。君山はその号で、字は資言、諱は龜太郎。慶應元年(一八六五)年生まれ、昭和二十一年(一九四)没。畢生の名著『史記會註考証』は日本のみならず、中国、台湾でも重視され

る近代『史記』学の素地をなす不滅の業績である。

本稿ではいわき市勿来関文学歴史館所蔵の大須賀筠軒宛瀧川君山書簡を、写真を掲げて、解説し、その内容について考証することを通して、詩文のみならず、南画についても実作と画論とを数多く遺した筠軒と『史記』や『論語』『孟子』の研究で傑出した業績を遺した君山とが、「近代」的な文学者、画家としての概念を超越して、両者とも経史子集を貫く鬱然たる学識を備えた人物であることを確認しようとする。筠軒は藩校の督学としてスタートした押しも押されもせぬ一流の漢学者である、君山も『史記會註考証』を遺すだけあって、近代最高の中国歴史学者であるにも関わらず、詩文にも造詣が深かった。前者については、詩文書画への造詣の深さを、後者についても経学史学に造詣が深かったと同時に、中国の詩詞にも通暁していたことを書簡の精読を通して浮かび上がらせようとするものである。筠軒と君山との存在と遺された文業とが、儒者としての「近代的」範疇を粉碎し、歴史学者としての「近代的」概念を大き

く逸脱しつつも、紛れもない「文学者」と「文学」とであったことを髣髴とさせようとするものである。

グローバル化や産官学連携の流れに支配される中で、空疎な実利一点ばりの風潮が人文科学をも骨抜きにしている。活字のみならず、くずし字や草書の文献を一字一字丁寧に読み解くという愚直な研究姿勢を嘲笑し、何か他にもっと高級な研究課題でもあるかのような錯覚に躍らされる研究者がいかに多いことか。日本、中国の古典学などは、その有力な担い手が「われわれは絶滅危惧種である」と標榜するほどに危機的状况にある。そのように現状をかこつ者からして、真摯な学術的姿勢を放擲し、グローバル化と有名無実の経済の発展に荷担するかのごとく、草書でしたためられた白文の漢詩文などには目もくれず、活字のテキストのみを北京音で直読して、日本語の基礎を為す「訓読」「訓訳」を否定する傾向にある。本稿はそのような支配的風潮に疑念を呈し、くずし字や草書、日本人の手に成る漢詩文を一字一字丁寧に読むことを通して明治期の知識人間の交遊における豊饒なる精神世界を開示するための試みとしたい。そのことを通して、欧米から導入された学問体系における専門の細分化と各国文学の「純粹主義」とが、極端に歪曲し、葬り去ってしまったものが如何に貴重なものであったかを垣間見て、そうした精神世界の恢復を祈念するものである。「純粹主義」というのは、外国文学の研究者が、一外国の出身者がその言語で綴った書籍しか読まず、その国の言語でしか会話をせず、その国の言語をしか書き綴らない

という姿勢を言うが、それをなしうる能力を備えた日本人の外国文学研究者は絶無にあらざれば、僅少であり、せいぜい、会話が可能なレベルが大半であり、よくて翻訳を介さずにその国の言語で綴られた書籍が読める程度に止まる。中国文学でいえば、日本人や韓国人、ベトナム人という漢字文化圏に属した諸国の人士が書き綴った文章を、蘇軾、歐陽脩、魯迅、巴金に比して、亜流として貶めて、一顧すらしないこともう一つの「純粹主義」という。しかしながら、純粹主義を奉ずる彼等は、音声機器やネイティブとのグローバルな交流を後盾に、会話ならばそれを可能とするであろうが、文言文（中国古典語、いわゆる漢文）を書き綴る能力については、甚だおぼつかない。甚だしきに至っては、漢文（白文）に句読すら切れない中国語教員すら少なくないというのが、現状であろう。そのような純粹主義的立場からは、本稿で見るとな漢学者の詩文や候文というものは、歯牙にもかけぬことが常態となっている。翻って、日本文学研究者について見ても、彼等は平安朝の仮名文字文学、和歌文学こそが日本古典文学であるという、もう一つの別種の純粹主義に呪縛されて、嵯峨天皇や菅原道真といった『源氏物語』研究に資すること大なる平安朝漢詩文を一顧だにすらしめない。紫式部が『史記』や『白氏文集』に通暁していたということなど、知つても知らぬふりをすることとなる。

一、明治四十五年五月八日付、大須賀筠軒宛瀧川君  
山書簡と君山「猗猗處吟稿序」

明治四十五年（一九一二）五月八日に、翌年の夏に逝去する最晩年の筠軒に宛てられた書簡を写真とともに原文にも見える読点をそのままに適宜句読点を添えて翻字しよう。本書簡は、近代韻文研究の俊秀田部知季氏が、いわき市勿来関文学歴史館の依頼を受けて整理考証された膨大な文献の中の一点であり、館の公開の許可を得て示すものである。以下に見る五つの書簡の書裁年次を明治四十五年と考証したのも田部氏である。各書簡の封筒に捺された消印にもそれは確認される。

○明治四十五年五月八日付筠軒宛君山書簡

「図一」

「此頃ハ態々珍味澤山御贈被下、

香色或過品川之産候と

賞玩罷在候。篤く御禮申上候。

却説先日參上仕候節、拝見

いたし候文集第一編の中ニ

これまで人口ニ膾炙したる牛

蠱行夜佇立等の諸篇見

当不申、尤今日之學徳にてハ、

老蒼の氣ニ乏しきかとの思召

有之候て、御廢棄被遊候かとも

存候へとも、少壯之時ハ少壯の詩あり、

老成の時にハ老成の作あり。少壯

の時、不能作老成之詩、老成

之人、亦不能作少壯之詩、思ハ

時ニ順<sup>シテ</sup>遷り、詞八年ニ因て變る、

是れ詩の史たる所以なり。鄭谷

の詩の喜ふへきもの獨り鷓鴣のみ

ならむや。楊巨源の作、楊柳に止ま

らず。白居易の野火吹不盡、春風

吹又生ハ願況ニ初めて見えし

時、驚嘆せしめたるもの

されとも

長慶集中に在りてハ、竹頭

木屑耳。尚存録不棄、昔人

豈我師ならずや。大江戸を驚

かし、河北を動かしたる此れ等

の詩を御集中ニ存録せざるハ、

心外の事ニ存せられ候。御一考

煩はし度候。いつれ其中

此の徳と珍味澤山の贈り  
 香色或道雨川と在りし  
 賞玩器を写すの禮下は  
 却説之方多し其節お丸  
 いろか文集第一編の中  
 二行を人々給矣一は牛  
 齋り初仲之等の法篇見  
 當ふか多しし學徒のい  
 老翁の筆と云ふまことの思  
 ありしはこれに後集と云ふ  
 所にも少壯と付いふ此の語  
 老翁の付いふ老成の作あり

ありしはこれに後集と云ふ  
 所にも少壯と付いふ此の語  
 老成の付いふ老成の作あり  
 の付いふ少壯と云ふは  
 人々の少壯と云ふ思ハ  
 時吹て遷りて年三因  
 是れ詩の史たる以て  
 のの喜ありきもの擲る楊柳の  
 ありしは楊巨源の作楊柳はま  
 らく白居易の詩吹突る風  
 吹又といふ後説と初の見えし

竹韻集  
 七慶集  
 木屑耳尚存不棄昔人  
 豈我詩あらんや大匠を  
 かへ心を動したる此  
 の詩を茶平に存留せし  
 外つるは  
 頌けし  
 六暇  
 新文千家保撰  
 七日  
 初軒先生

図一

參上、萬可申上候へとも、公私多忙、心身

無暇以書中申上候。順時

爲斯文千萬保攝。頓首。

五月八日夜龜太郎

筠軒先生

侍史」

右の書簡中、筠軒の「牛疊行」と「夜佇立」という漢詩作品が、若き日に人口に膾炙するほど評判をとった名作であるにも関わらず、筠軒の漢詩集の稿本に採用されていないことを瀧川が残念に思うとのくだりがある。このくだりはこの手紙が執筆された明治の末から遡ることおよそ十年の、次の瀧川の漢文の序にもすでに見えていた。その序文「猗猗處吟稿序」(『筠軒詩鈔』卷一)を見ておきたい。

乙酉之夏、余遊仙臺。與諸友飲於一樓。酒酣、客有歌牛疊行者。其結末曰、椽釘響絕夜闌寂、老梟一聲山月青。余喜之。問誰作。

客曰、是磐城平人神林筠軒所賦。筠軒慶應中、載筆遊此地。時

年尚弱冠。才華爛發、奇思空湧。把筆頃刻數百言。大槻磐溪主藩學養賢堂。一見激賞曰、奇才。奇才。他日必名于家。余由是

知東北有筠軒氏者矣。後十餘年。余奉職於仙臺第二高等學校。

同僚大須賀翁。能詩。亦號筠軒。年齒五十六七。顏丹頭童。白髯鬣鬣然。語帶北音。余疑其爲神林氏。嘗試問曰、君豈非賦牛疊行者乎。翁笑曰、是余年少弄筆者、何足道乎。因示其所著猗々處吟稿。且使叙之。繙而讀之。或古澹閒雅、或沈鬱渾厚。出

入陶謝韋柳之間。余於是知磐溪不我欺也。翁僑居土樋。廣瀨川流於其下。色曳素練。聲鳴佩環。愛宕之山橫于其前。紫嵐翠烟、時來入戶牖之中。翁日夕居此。超然高舉。悠然遠思。時揮筆以賦、詩情文思、與天地造化融會混同。其作之可傳者。將不止於此矣。惜夫磐溪已逝。不能見也。

明治戊戌十二月 辱交瀧川資言識。

乙酉(明治十八年・一八八五)の夏、余仙台に遊ぶ。諸友と一樓に飲す。酒酣はにして、客に「牛疊行」を歌ふ者有り。其の結末に曰く、釘を椽つの響き絶えて夜闌寂、老梟一声山月青し。余之を喜みて誰れの作なるかを問ふ。客曰く、「是れ磐城平の人、神林筠軒の賦する所なり。筠軒、慶應中、筆を載せて此の地に遊ぶ。時に年尚ほ弱冠、才華爛発し、奇思空湧す。筆を把れば頃刻にして數百言なり。大槻磐溪藩學養賢堂を主る。一見して激賞して曰く、奇才なり。奇才なり。他日必ず家に名あらしめん、と。余是れ由り東北に筠軒氏有るを知る者なり矣。後十餘年にして、余職を仙台第二高等學校に奉ず。同僚の大須賀翁、詩を能くす。亦た筠軒と号す。年齒五十六、七。顏丹く頭童たり。白髯鬣鬣然たり。語は北音を帶ぶ。余、其の神林氏爲るかと疑ふ。嘗つて試みに問ふて曰く、君豈に牛疊行を賦せし者ならん乎。翁笑ひて曰く、是れ余年少くして筆を弄する者、何ぞ道ふに足らん乎。因りて其の著はす所の猗々處吟稿を示す。且つ之に叙せしむ。繙きて之を読む。或は古澹閒雅、或は沈鬱渾

厚。陶謝韋柳の間に入出す。余是に於いて磐溪の我を欺かざるを知るなり。翁、土樋に僑居す。広瀬川、其の下を流る。色は素練を曳き、声は佩環を鳴らす。愛宕の山、其の前に横たはる。紫風翠烟、時に來りて戸牖の中に入る。翁日夕此に居り、超然として高举す。悠然として遠く思ひ、時に筆を揮ひて以て賦す。詩情文思、天地造化と融會混同す。其の作の伝ふ可き者、將に此に止まらざらんとす矣。惜しい夫、磐溪已に逝きて、見る能はざるなり。

明治戊戌（三一・一八九八）十二月 辱交瀧川資言識す。

瀧川は書簡の中で、唐の詩人の中で評判をとった作品以外にも名作があることをいいながらも、やはり評判をとった作品は後世に伝えるべきことを言う。

君山が言及する唐詩を引用、訓読しておく。初めは鄭谷の詩。この詩の評判が高く、鄭谷は鄭鷓鴣とまで呼ばれた。日本では初期俳諧の神野忠知が「白炭ややかぬ昔の雪の枝」という句を喧伝されて、「白炭の忠知」と呼ばれた類いと見なせる。

晚唐、鄭谷「鷓鴣」

暖戲煙蕪錦翼齊 暖に煙蕪に戯れ 錦翼齊し  
品流應得近山雞 品流すれば応に山雞に近きを得べし  
雨昏青草湖邊過 雨は青草湖邊に昏くして過ぎ  
花落黃陵廟裡啼 花は黃陵廟裡に落ちて啼く  
遊子乍聞征袖濕 遊子乍ち聞いて征袖湿ひ

佳人纔唱翠眉低 佳人纔かに唱うて 翠眉低る  
相呼相應湘江闊 相ひ呼べば相ひ応ず 湘江闊く  
苦竹叢深日向西 苦竹叢深くして日は西に向ふ  
次は楊巨源の「楊柳」の作だが、瀧川はこれ以外にも名作はあるとする。

楊巨源「折楊柳」

水邊楊柳趨塵絲 水辺の楊柳 趨塵の糸

立馬煩君折一枝 馬を立てて君を煩して一枝を折らしむ

惟有春風最相惜 惟だ春風の最も相ひ惜しむ有りて

殷勤更向手中吹 殷勤に更に手中に向いて吹く

次は第三句を瀧川が誤って、「野火吹不盡」とした句を含む白居易の詩である。

白居易「賦得古原草送別」

離離原上草 離離たり 原上の草

一歲一枯榮 一歲に一たび枯榮す

野火燒不盡 野火 燒き尽さず

春風吹又生 春風 吹いて又た生ず

遠芳侵古道 遠芳 古道を侵し

晴翠接荒城 晴翠 荒城に接す

又送王孫去 又た王孫を送り去り

萋萋滿別情 萋萋として別情滿つ

一句目の「離離」が草木の生い茂るさまを指す擬態語。最終句の

「萋萋」も同じような意味で、同時に胸の中に屈託が一杯になる様も暗示している。

最後の白詩には君山の覚え違いがあるが、それをあげつらうのは当たらない。君山は恐らく何も見ずに、日頃愛誦する漢詩を思い出すままに手紙に書き付けたものと思われる。論孟の注釈や『史記會註考証』で知られる君山であり、未だその手に係る漢詩を見るに及んでいないが、恐らく少なからぬ詩作が存したものと推定される。

経学史学で著名な学者であっても、詩詞を閒却しないというのが、現在は喪われた過去の中国学者の姿勢であり、学界におけるかかる人士の再登場と増加とが心待たれる。われわれの生きる現代は機械の性能が日進月歩であるに反して、人間の知力体力は日々減退しており、これは狂気の沙汰としか思えない。

瀧川の手紙や序文に言及されていた「牛蠱行」というのは丑の刻詣でを詠じた古詩であり、手紙に出ていた「夜佇立」というのはおそらく以下にみる「幽霊行」という作品ではないかと思われる。瀧川や大須賀のような鴻儒碩学がかかる「怪力乱神」にひとかたならぬ関心を注いでいたというのは、興味深い事実としなくてはならない。

## 二、大須賀筠軒「牛蠱行」「幽霊行」

### — 咸宜園詩と師匠良齋詩との比較 —

それでは君山が、初めて耳にしてから二十年近く愛誦し、筠軒には詩集に収載すべきだと呈言し、筠軒がなかなかそれを承諾しなかったという曰くつきの「牛蠱行」を次に見て行くこととする。中国に似た風習があるかどうかは知らないが、丑の刻詣ではまさに日本秘せられた民俗を詠じるものであり、日本漢詩ならではの作といえよう。筠軒に先立って、日田咸宜園の俊秀、中島子玉（一八〇一〜三五）に李賀の作風に擬した「丑時咀 倣李長吉體」（国立国会図書館本『中島米華稿本』巻八、『宜園百家詩』初編巻三では「牛蠱 倣李長吉體」と改題）がある。それに唱和した廣瀬旭莊（一八〇七〜一八六三）の「和島子玉丑時咀」（『梅墩詩鈔』初編巻二）とそれをブラッシュアップした「丑時咀」（『梅墩詩鈔』初編巻三）とがある。いずれも子玉や旭莊が十代後半から二十代にかけての詠である。先声をなしたのは中島であって、それを凌がんとして旭莊が続いて二首を詠じたことがよく分かるが、福島理子氏にすでに言及がある<sup>1)</sup>ので、そのことには深入りしない。

戊辰戦争以前、二十代の若き筠軒は、恐らくこれら先輩の少年詩人たちの作を意識して、左の詩を詠じた。九州豊後日田の詩人の作が福島磐城の詩人の耳に達することを疑うなかれ。廣瀬淡窓の

『遠思樓詩鈔』（天保八年刊行）にしても、廣瀬旭莊の『梅墩詩鈔』初編（嘉永元年五月刊）にしても、大坂書肆で版行されて、日本全国に流布していたのである。二人の廣瀬はこの版行によって一躍全国区の漢詩人となりおさせた。

風俗を詠じるということで、「行」という楽府題をしつらえたのである。『筠軒詩鈔』卷一『劫灰殘稿』に見える。

草木夜眠水聲冷 草木夜眠りて 水声冷たり

神燈欲死瘦於星 神燈 死なんと欲して 星よりも瘦せたり

千年老杉半身朽 千年の老杉 半身朽ち

仄立古廟鬼氣腥 古廟に仄かに立ちて 鬼氣腥し

纏素娘子藍如面 素きを纏ふ娘子 藍如たる面

頭戴銀燭手鐵釘 頭に銀燭を戴き 手には鉄釘

長髮櫛風鬢鬆亂 長髮 風に櫛りて 鬢鬆として乱れ

石壇無人影伶仃 石壇人無く 影伶仃

泣掣鈴索拜且訴 泣いて鈴索を掣し 拜し且つ訴ふ

此恨不徹神無靈 此の恨み徹せずんば 神に靈無からん

椀釘響絶夜闌寂 釘を椀つ響きは絶えて 夜闌寂たり

老梟一聲山月青 老梟 一声 山月青し

これには訳を付けて見よう。

「草木も眠るといふ夜丑三つ時のしじま、水の音だけがさみしく

鳴り響き、神社の御神灯の炎は今にも消えかけていて、夜空に瞬く星よりもかすかな光を放つ。

樹齡千年には成ろうという杉の老木が聳えているが、その幹は半ば朽ちている。その杉と同じようにこの神社の御廟の傍らにたたずむ者がいるが、姿は見えず寒気ばかりが流れる。

白装束の若い娘が立っていて、その顔色は真つ青であり、頭の前と左右には鉄輪に白い蠟燭を立てていて、手には五寸釘を握っている。

長い髪は風に吹かれておどろに乱れ、本殿の石段には他に人影もなく、この者だけが悄然とたたずんでいる。

泣きながら縄を引いて鈴を鳴らし、お辞儀をしてから何か訴えかけている。曰く、この恨みが晴らせないならば、神も仏もないものを。

やがて藁人形をご神木に打ちつける音もぱったり止んで、あたりはまたしじまに包まれて、夜空には青白い月が昇って梟の鳴き声が響き渡った。

瀧川君山が二十歳の夏に仙台に旅したおりに、そこでの宴会で「牛疊行」を歌うものがあって、その最終聯を記憶し、ここに書き留めた。引用するだけで、一の評語も附さないが、ここには君山の「牛疊行」に対する好意的評価が託されている。つまり、丑の刻参詣における緊張感、恐怖感が最高潮に達するのは、紛れもなく、恨む相手の形代の藁人形を釘で木に打ちつけ、その音が周囲に響き渡

るその瞬間にあるわけである。中島子玉の詠では、「金釵夜椽<sup>た</sup>くも人の知る無く、天を仰いで一笑すれば瓠犀白し」とあった。「金釵」は白装束の女性の鉄輪であり、「夜椽」が釘を打ちつける所作であろう。「瓠犀白し」とあるのだから、女は人形を幹に打ち付ける儀式の後に呪いの成就を感知して天を仰いでにやりと白い歯をむき出して笑ったのである。廣瀬旭莊の二作では、「冬冬として樹に釘うたば深恨徹す、此の恨みを狂夫は知るや否や」(「和島子玉丑時咀」)、あるいは「鐵釘<sup>ち</sup>ち来りて蒼崖を震はし、千年瘦杉赤血殷し」(「丑時咀」)となっていて、森閑たる丑三つの夜空に擬音語「冬冬」として「鐵釘」を打ち込む音が鳴り響き「蒼崖」を震わすさまを詠じているのである。

しかし、筠軒の本詩は、先行作とは異なり、その儀式の一部始終を描写することを敢えて避けて、すでに釘打ちが終わってその場を立ち去る白装束の娘の姿が闇に吸い込まれた後の、冒頭と同じ水の流れる音くらいしか聞こえない深い静寂を詠じて終局とし、餘韻嫋嫋たらしめているのであり、その結末に敢えて最高潮に達する緊迫した場面を詠じない技法を君山は讃えていることとなる。

筠軒は筠軒で、江戸でも流布し、仙台では大きな流行を見た自作の「牛疊行」を人生の掉尾を飾る詩集には抹消すべき若書きにして、かつ九州の中島子玉や広瀬旭莊に先行作のある追随作として、収録しようとはせずに、この親子ほど年の離れた才子に、「少壮」の時にしか作れない詩というものがあるのだから、その記念として、あ

るいは詩集全体で、年次を追っての作風の変遷を示すべく、本詩を採用すべきだという助言を呈せらるるに至ったのである。しかし、老いて東北随一の儒者との評判を博しつつも、辺幅を飾らない筠軒は、この二十四歳年下の君山の助言を嘉納して、自らの詩集に「牛疊行」をそっとすべりこませたのであった。「牛疊行」のすぐ後に、やはり若書きとの羞恥を筠軒はおしかくして、長大な「幽霊行」をも収録した。これまた「怪力乱神を語ら」ざるべき碩学鴻儒たる大須賀筠軒が、人情の機微を掬い上げるために敢えて詠じた作なのであった。ただ、唯一、左の「幽霊行」着想の契機をなしたものの先例として、大須賀筠軒の漢学の師匠たる安積良斎が天保十四年に詠じた「俠客行」がある。<sup>(3)</sup>良斎の歌う「俠客」は、幕末の度重なる飢饉の苦境に陥った折りに、恐らく良斎自身が抱いていたであろう貧富の格差などの社会矛盾への憤激が凝って一丸となった存在であった。それは虚構された架空の人物ではあったが、実在の国定忠治などの弱きを扶け強きを挫く「俠客」の逸事と重複する要素も少なからず作中に点綴されていて、虚実のあわいに成った諷諭詩であった。一方、弟子の筠軒の「幽霊行」もまた「俠客」が異国から飢饉に喘ぐ上州の一村に偶然草鞋の紐を解いた旅人であったのと揆を一にして、峻険を乗り越えてやってきた「孤客」＝孤独な旅人であったのであり、末尾で幽霊の口をかりて、明治維新後の日本の風俗の頹廢、特に女性の美德の崩壊を痛憤するのは、筠軒自身であって、「幽霊」という明確な虚構により、社会矛盾への憤激を漏らすという点は、

師匠の良齋に学ぶこと深いとしなくてはならない。押韻は韻目上平声四支韻の一韻到底である。七十五句の長篇の古詩を一韻到底で作り上げることは、容易なことではない。範を求めたと目すべき師匠安積良齋の「俠客行」もまた一韻到底の長篇の古詩であるが、これは五十六句から成る。恐らく「出藍の誉れ」を自らが博することが、師匠の学恩に報いることであるとの確信が筠軒にはあったのであろう。

一韻到底の古詩は全編を一气呵成に詠じたことを髣髴とさせるが、内容は章段に分かちうる。1〜4が主人公の旅人が幽霊と遭遇する土地に足を踏み入れるプロローグ。5〜14は旅人が足もとの野ざらしに気づきその生前に思いを巡らす段。15〜22は幽霊が登場する段。23〜40は幽霊が生前良家の令嬢であつて、ある晩に盗賊一味に襲われて、自らは誘拐されて、賊の要塞まで連れて行かれたことを記す。41〜48はあわや賊の首魁に凌辱されんとして、貞節を守り通すべく、舌かみ切つて令嬢が果てるまでである。49〜52は、うち捨てられた令嬢の死骸が、歳月とともに風化して白骨に成り果てる内容ある。

53〜56はかかる令嬢の非業の最期の顛末を、主人公の旅人の詞藻を駆使して永遠に記録してほしいと願われる場面である。師の良齋の「俠客行」は56句で終局する。これ以後に筠軒が展開する世相の風俗への諷刺は、良齋と同趣向に甘んじるならば、ここまでの幽霊の陳述に風俗の頹廢への痛憤も含ませなくてはならないが、筠軒はそうしなかつた。57〜64は幽霊は消えて、現実に戻りつた主人公

が、山中の宵闇の中で、幽霊との遭遇とその貞烈なる言辞を反芻して感涙にむせぶ場面である。65〜78は幽霊の悲壮にして清冽な言辞を振り返り、その堅固不拔の貞節を讃え、明治維新以後の子女の風俗の壊乱を慨嘆し、この幽霊の言辞を永遠に伝えようとの決意を新たにする場面である。

「幽霊行」(「劫灰殘稿」)

- |    |         |                    |
|----|---------|--------------------|
| 1  | 孤客一劍度嶮崎 | 孤客一劍 嶮崎を度り         |
| 2  | 風霜透骨秋凄其 | 風霜は骨に透りて 秋凄其たり     |
| 3  | 前途數里人烟絶 | 前途數里 人烟絶え          |
| 4  | 落日顧影如蒙魍 | 落日影を顧みれば蒙魍の如し      |
| 5  | 忽驚髑髏横脚下 | 忽ち驚く髑髏の脚下に横たはるを    |
| 6  | 荒草若衣纏殘肢 | 荒草衣の若くして殘肢に纏ふ      |
| 7  | 肉脱髮稀眼雙幽 | 肉は脱し髪は稀にして眼は双ながら幽む |
| 8  | 切齒仰空如有思 | 切齒空を仰いで 思ひ有るが如し    |
| 9  | 堯耶桀耶夷耶跖 | 堯か桀か夷か跖か           |
| 10 | 不知賢愚將妍媸 | 知らず賢愚と妍媸とを         |
| 11 | 可憐生時最靈物 | 憐れむ可し 生時最も靈物なるを    |
| 12 | 無復蜡人掌除齜 | 復た蜡人の齜を除くを掌る無し     |
| 13 | 冷雲綿冪天色黑 | 冷雲綿冪として 天色黒く       |
| 14 | 膈臆傷心重蹢踟 | 膈臆、心を傷ましめて 重ねて蹢踟す  |
| 15 | 一道腥風捲雨起 | 一道の腥風 雨を捲きて起こり     |
| 16 | 鬼聲逼人啾々悲 | 鬼声人に逼りて 啾々として悲しみ   |

大須賀筠軒と瀧川君山との交遊

- 17 忽然燃出一團燐 忽然として燃え出だす 一団の燐
- 18 髻髯幽靈現舊姿 髻髯として幽霊 旧姿を現じ
- 19 玉樓骨立銀海眊 玉樓骨立ちて 銀海眊し
- 20 蒼顔濺血髮如砒 蒼顔 血を濺いで髮砒の如し
- 21 欲語吞聲先一哭 語らんと欲して声を呑んで先づ一哭す
- 22 呼吸喘喉織於絲 呼吸すれば喉喘ぎて糸よりも織し
- 23 泣訴妾是良家女 泣いて訴ふ 妾は是れ良家の女
- 24 養嬌深閨人未知 嬌を深閨に養はるゝも人未だ知らず
- 25 自憐文君鏡裏影 自り憐れむ 文君 鏡裏の影
- 26 両痕遠山描織眉 両痕 遠山 織眉を描く
- 27 露濕羅裳撲螢夕 露は湿ほす 羅裳 螢を撲つの夕べ
- 28 花映繡床懷春時 花は繡床に映じて春を懷ふ時
- 29 慧心解讀列女傳 慧心解く列女伝を読み
- 30 麗情兼構香奩詞 麗情兼ねて香奩の詞を構ふ
- 31 擇婿未得好伉儷 婿を択ぶも未だ好伉儷を得ず
- 32 不許登徒登牆窺 登徒の牆に登りて窺ふを許さず
- 33 一夕風雨媒強賊 一夕 風雨 強賊を媒ちし
- 34 白刃亂入紅閨帷 白刃乱れ入る 紅閨帷
- 35 家人竄匿侍婢泣 家人竄匿し 侍婢泣く
- 36 風蝶驚散櫻桃枝 風蝶驚き散ず 桜桃の枝
- 37 袖掩絳脣泣不得 袖もて絳脣を掩ひて泣くことを得ず
- 38 身在賊腋暗中馳 身は賊腋に在りて暗中を馳せ
- 39 風吼水怒不知處 風は吼え水は怒りて処を知らず
- 40 遠投賊窟踪誰追 遠く賊窟に投じて 踪誰か追はん
- 41 賊中渠魁獐如鬼 賊中の渠魁獐なること鬼の如し
- 42 鳶肩豺目張虎髭 鳶肩豺目 虎髭を張る
- 43 爭堪強要待枕席 争でか強要せられて枕席に侍するに堪へんや
- 44 彈箏明志無由辭 箏を弾じて志を明らかにするも辞するに由無し
- 45 嬌心自誓秋霜節 嬌心自から誓ふ 秋霜の節
- 46 肯許賊羶塵水肌 肯へて賊羶の水肌を塵するを許さんや
- 47 毛惜終能嚼舌死 毛惜す 終に能く舌を嚼みて死するを
- 48 蘭碎花飛狂風吹 蘭碎け花飛んで狂風吹き
- 49 遺憾寒烟老壑底 遺憾なり寒烟 壑底に老ゆるを
- 50 滿庭芳詞知者誰 滿庭の芳詞 知る者は誰ぞ
- 51 日炙雨淋枯骨白 日炙雨淋しくして枯骨白く
- 52 游魂イ于迷所之 游魂 イ于之く所に迷ふ
- 53 願君爲妾記顛末 願はくは君妾の為に顛末を記し
- 54 好字繼勒黃絹碑 好字もて繼いで勒す 黃絹の碑
- 55 妾也雖死長不朽 妾も也た死すと雖も長へに朽ちざらん
- 56 流芳餘烈千秋垂 芳を流す 餘烈千秋に垂れん
- 57 笠檐滴殘雨聲絶 笠檐滴残して雨声絶えたり
- 58 缺月吐稜山雲披 缺月に吐きて 山雲披く
- 59 瞥滅幻影烟耶夢 瞥滅せる幻影 烟か夢か
- 60 四顧蒼茫夜色奇 四顧すれば蒼茫夜色奇なり

- 61 東海男子膽如斗 東海の男子 膽斗の如し  
 62 諦聽始終毫靡遺 始終を諦聽して毫も遺る靡し  
 63 手埋香骨薦溪水 手づから香骨を埋めて 溪水を薦む  
 64 感激奇遇交涕洟 奇遇に感激して交々涕洟す  
 65 嗚呼生也貞靜死也烈 嗚呼 生きて也た貞靜にして死するも  
     也た烈  
 66 知恥知義優男兒 恥を知りて義を知るや男兒に優る  
 67 直將薄命博名節 直ちに薄命を將て名節を博す  
 68 愧殺金屋阿嬌姫 愧殺す 金屋の阿嬌の姫  
 69 輓近遺風掃地盡 輓近の遺風 地を掃つて尽き  
 70 枉將貞操爲愚痴 枉げて貞操を將て愚痴を爲す  
 71 有才徒能芍藥謔 才有るは徒らに芍藥の謔を能くするのみ  
 72 有色空弄形管貽 色有るは空しく形管を弄して貽すのみ  
 73 鑽穴踰牆聯翩是 穴を鑽して牆を踰ゆ 聯翩として是なり  
 74 冶容誨淫堪嗟嗜 冶容もて淫を誨ゆ 嗟嗜に堪へんや  
 75 咄々異事關風教 咄々異事を風教に關はらしめ  
 76 可爲幽靈慳吊詩 幽靈の為に吊詩を慳む可けんや  
 77 私擬冰魂雪魄句 私かに擬す 冰魂雪魄の句  
 78 表出英烈夫人祠 表出す 英烈夫人の祠  
 現代語訳を掲げて、長き内容の整理をしよう。  
 「一刀を携えたさすらいの旅人が峻険なる山路を越えてやってきた  
 が、秋なのに厳しい寒さで風の冷たさが骨身に伝える。

この旅人の前途にはどこまでも人家の煙りすら立ちのぼらず、夕陽が傾いて後ろを振り返ると、この者の影はあだかも鍾馗様のようにだ。

おもわずたじろいだのは、足元に髑髏が横たわっていたからで、伸び放題の草木が衣裳のようにくさりかけた骸に絡みついている。骨にはすっかり肉がなくなっていて、頭骨には髪はほとんど付いておらず、目はすっかり落ちくぼんでいるが、歯を食いしばって天上を仰いでいるさまは、恨みを含んで旅立ったものの形相だ。

生きているときは、名君であったか、悪徳の王者であったか、はたまた清廉潔白の家臣であったか、とんでもない盗人であったか思ひ巡らされる。

利口な男であったか、愚かしい男であったか、絶世の美女であったか、二目と見られぬ醜女であったかとんと分からぬ。

ああ、在りし日は随一の切れ者であったのに、今やこのむくろを取り除いて土にかえしてくれる蛆や人足すら存しない。

寒気を伴う雲が空一杯に広がりまるで天幕のように垂れ込めるが、空は真つ暗となった。胸の中は屈託ばかりでまた歩を進めにくくなっている。

一陣の腥い風が雨を伴って巻き起こり、幽霊の聲がわれわれに訴えかけ、しくしくと悲しむ声をした。

突然ひとかたまりの丸い燐の炎が燃えあがり、幽霊はあだかも生前はかくもありしならんといった昔の姿を現じ出したのであった。

肩のあたりが骨ばっている者で、真つ白な瞳は完全に明を失っていた。

青白い顔には血が降り注ぎ、物語りを始めようと声を呑んでから一たび大泣きした。

喉から漏れる呼吸も吐気もゼイゼイと喘いで絹糸のように細く頼り無い。泣きながら次のように旅人に訴えかけたのであった。

泣きながら言うのは、「あたくしはもと良家の令嬢として慈しみ育てられたが、自分の魅力に深窓で磨きをかけたが、誰にも気づかずに育った。

自分一人で卓文君のような美女だと手鏡で顔を見て思い込んでおり、左右両目の遠山の稜線のようにくつきりとした眉は、細長で美しく描いてもらった。

夜露が湿らされた、高貴な絹織物をまとって、夕べに螢を捕まえようとしていた。花は刺繡のついた寝台の幕の傍らに生けられていて、春の訪れを知ると人恋しくなった。

理解のよい質で『列女伝』を読み解き、女心を籠めて艶詩を詠じることすら出来た。

年頃になって婿を選ぶということとなったが好伴侶は得られないし、だからといって奔放な若者に挑まれても靡かなかった。

ある晩暴風雨の音に紛れてわたくしの家に盗賊が押し入って、白刃を閃かしてわたくしの寝台にまで襲いかかった。家の者はみな息を潜め、女中は泣き叫んだ。

風に翻弄される蝴蝶が桜桃の枝から逃げ去るようなわたくしは袖で自らの脛をおさえたまま泣くことすらできなかった。

やがて我が身はひたはしる盗賊の小脇に抱えられて、風や雨が猛然と吹き付ける中、自分がどこにいるのかわからなくなった。だいぶ遠くの盗賊の拠点まで連れられて来たが、その跡を追うものは一人もおらなかつた。

盗賊の首魁はたけだけしいこと鬼畜のようであり、鳶のような怒り肩で狼のように目が裂けていて虎のような鬣を蓄えていた。

こんなものに脅されて夜とぎの相手をさせられてはたまつたものではない。箏の琴を演奏して貞節を守ろうとしたがどうしても拒みきれそうもない。

か弱き心に鞭を打って胸に死を決して操を守ろうと誓い、賊の汚らわしい手で美しいこの肌が汚されるのを許すつもりはない。

純潔を保たんために終にわたしは舌かみ切って自殺した。白い蘭の花が引きちぎられ突風に引き飛ばされたようであつた。

寒々とした靄に包まれて谷底に時を過ごすのはいかにも無念であり、漸く才能を開花させたその詞藻は誰にも知られないこととなつた。

日にさらされ雨に打たれて次第にわたしの骨は白きを増し、わたしの靈魂は亡骸の上に漂つたまま成仏できずにいる。

どうぞあなた、わたしのために、わたしの身を襲つた不幸の顛末を書き留めてください。あなたの備えていられる素晴らしいお言葉

でわたしのことを碑に刻んでください。

そうすればわたしが消えても永遠に魂は消えない。貞節を守って  
自害したことも永久に伝わろう。

幽霊がそう言い終わった瞬間、笠の滴のしたたりが間遠になりや  
がて雨音は絶え、雲が開いて三日月が山の端に上ったのが見えた。

幽霊の姿は忽然と消えて雲霧が夢幻であったかとわが目を疑った。  
あたりを見回すと青白くぼーっとして美しく輝いていた。

このさすらいの旅人は肝の据わった日本男児で、幽霊の言うこと  
を一言一句聞き漏らさなかった。

野にさらされていた女の白骨を埋葬して、谷川の水を汲んで手向  
けた。この出会いに感激して涙を滂沱と流したのである。

ああ、この女性は生きては貞節を守り通して壮烈な死を遂げた。  
羞恥をわきまえ正義を知る度合いは男子をも凌ぐであろう。

迷うことなく命を捨て守節の美を伝え、今の世の深窓の令嬢たち  
を恥じ入らせて顔色無からしめた。

明治維新この方江戸時代の美德は地を払って失せてしまい、貞操  
などは打ち捨てて愚行を為している。

才ある者はその美貌を生かして虚言を弄し、容貌の備わった者は  
その筆で徳義を記すことなど絶えて無い。

不義密通など痕を絶つこともなく、美貌もて淫行を弘める風習も  
枚挙に遑が無い。

ええままよ、かかる奇談異聞を叙して、世相の頹廢を穿たんがた

めに、幽霊のために、追悼詩を綴るのにやぶさかでは無い。

そつと氷雪のように潔白な女性の魂を詠じた詩句をなし、あつぱ  
れすぐれたこの貞女を祭る祠の替わりとしたい。

すでに句頭に附した番号に従って、内容を章段に分けたのだが、  
師匠良齋の「俠客行」とは撰を異にして、世相諷刺の言は、幽霊の  
消えた後の、旅人の述懐として表現されていることを記した。

良齋の場合、飢饉に見舞われている上州の山村に足を踏み入れた  
俠客が、貧富の格差を一時的にでも是正すべく、金満家から金銭を  
収奪して、家族の中からも陸統と餓死者を出している貧農の間に、  
奪った金銭を配分するという展開であった。良齋は、金満家を恫喝  
して金銀を醸出させるに当たって、長ドスをふりかざしながら恫喝  
する段で、世上の拝金主義的な風俗の頹廢を討つのである。

良齋の筆は、まず上州の一村に足を踏み入れ、険峻にして不吉な  
山容と荒廢した土壌を描いた後に、悪天候により穀物がとれず、餓  
死者が路上に横たわる凄惨な情景を映し出す。「客観的」描写が既  
に諷刺への伏線をなす。その後には村内の金満家各戸を訪い、諄諄と  
して不義にして富かつ貴き状態を自覚せしめんための説論を始めた  
のであった。すでに拙稿で「俠客行」については全文を引用、解釈  
している<sup>4</sup>ので、ここではこれ以上触れないが、やはり師匠のものは、  
諷刺と自然描写とが渾然一体となっていて、老成の筆になるものと  
して、若き筠軒の才華も一歩及ばないであろう。しかし、同じ旅人  
を叙事詩に登場させて、良齋は旅人自身の言辞の中に諷刺を内包せ

しめ、筠軒は旅人に語りかける幽霊の言葉をさらに旅人が分析して諷刺性を析出するのである。いずれにしても虚構の人物の言辞は、とりもなおさず、作者筠軒と良齋の語りたいたいことでもあったに違いない。少年筠軒努めたりというべきであり、世の好評を博したのもむべなるかなであった。

漢詩を和歌俳諧と同断に花鳥風月を詠じるものとは見えない者、あるいは白髪三千丈式の誇張表現で悲憤慷慨を事とする表現媒体としてしか見られない者には、かく韻文表現に拠って、良齋が自在に環境、経済、道義を、虚構の「俠客」に説かしているのに驚きを禁じ得ないであろう。

翻って、その高弟であった大須賀筠軒は、師匠のかかる虚構による世相諷刺の試みに感激したが、現実と抵触する「俠客」を虚構としてでも詠じることは出来ず、さらに近代に至ってはその存在を荒唐無稽とされた「幽霊」の言辞に託して、明治維新の後の道義の墮落を諷刺するに止まったのであった。日本漢詩文というジャンルは幕末から明治中期にかけて、最高潮に達して、その後 ゆったりと戦後は急速に下降線を辿ったのである。そして、現状に肯定追随するを常とし、進歩史観に支配された日本近代文学においては、研究の対象外とされてしまったのである。しかし、過去の文業を仔細に読み解き、腐敗歪曲した現状にはつながらない、あるいは現状を是正改善する潜在力を秘めた「忘れられ」「捨てられた」可能性の束として再評価することは、人が機械に自らの魂を譲り渡し自滅の道

を辿りたくないならば、必須のことであり、その確信を以て、斯界に再び目を向ける人士を誘わんとする。

○明治四十五年六月二十七日付筠軒宛君山書簡。

(図二)

御腹痛にて日々御平臥

被遊候由、是昨今不順

之氣候所致や。折角

御保攝所祈候。御見舞二

參上可仕候處、試験

採點中非常二多忙

何れ近日之中、伺候可仕候。

猗々處吟稿引、命二

任せ勿々妄批御取捨

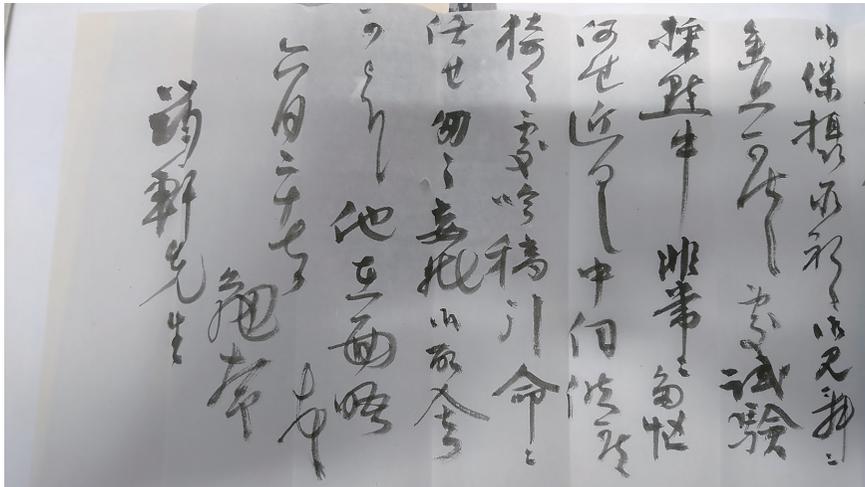
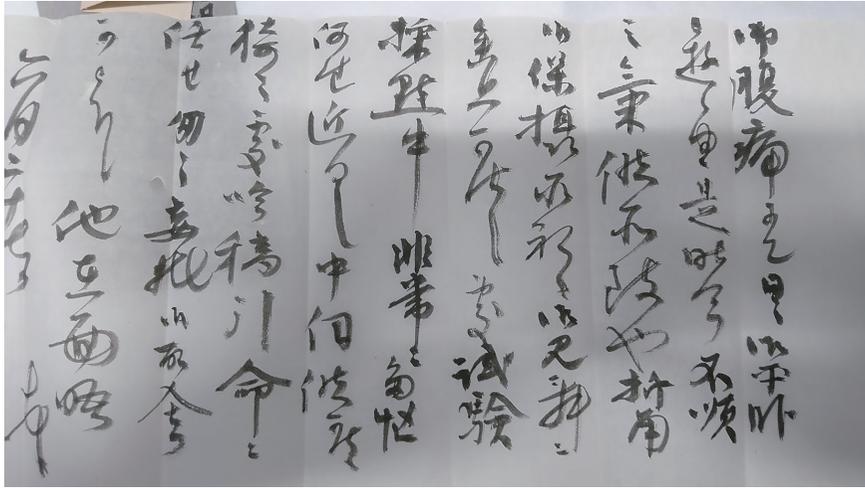
可被下候。他在面晤。

頓首。

六月二十七日 龜太郎

筠軒先生

右の書簡に見える、「猗々處吟稿引」というのは、刊本『筠軒詩鈔』巻七に冠せられている筠軒の「引」であろう。自作の漢文の批閱を乞うなどの姿勢は、この『猗々處吟稿』に序を寄せた二十四歳年下の瀧川君山に最晩年の筠軒が絶大なる信頼を寄せていた証左である。また君山もその期待に応えんとして鋭意努力している様子が感得さ



図二

れる。君山の加朱の存する筠軒の草稿を見るに及んでいないが、頗る興味を惹く。ここでは、その「妄批」を「取捨」した後の刊本の「引」を読んでおこう。

余之移仙臺。佐澤香雪諸子、新創詩社曰白鷗。永沼柏堂諸子、亦設一社曰啾々。皆推余爲盟主。一瓢一簞、談笑怡然。相忘乎風塵之表。或云、詩宜有變化。如月例吟會。其所對地與人常同。花月雨雪之景。亦每年不異。況分韻限字。以拘束其思。如是而求其詩之變化不亦難乎。余曰、是一隅偏見。非知詩者也。蓋時運之變遷、人意之移易。有日不同者。活機動處。雲行水流。聲律雖嚴。未嘗不沛然有餘。故分韻限字。以專其思。或次或疊。韻愈窄則思愈精。警句奇語。有時天來。非偶然也。如是爲拘束詩思。是放言自暴爾。豈足與談文字之妙乎。筠猗處吟稿。概與吟友同賦者。因引以此言。筠叟履。

余の仙臺に移るや、佐沢香雪諸子、新

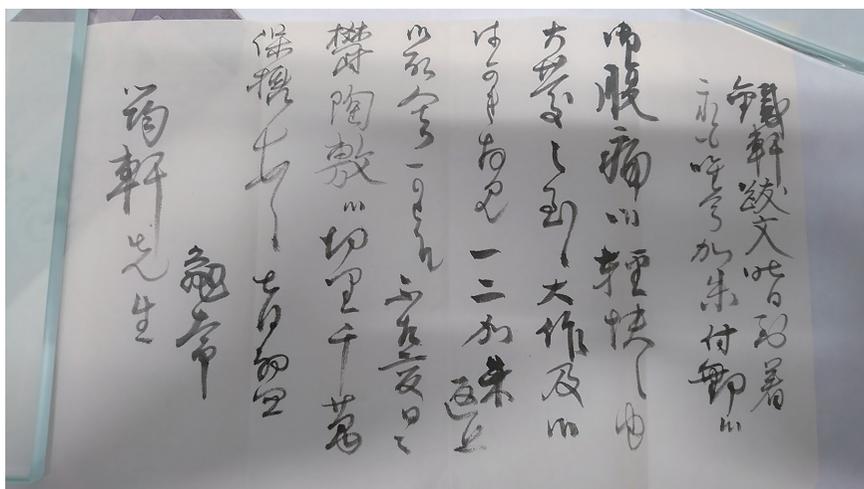
らたに詩社を創めて白鷗と曰ふ。永沼柏堂諸子も亦た一社を設けて嗜すと曰ふ。皆余を推して盟主と為す。一瓢一簞、談笑怡然として、風塵の表を相ひ忘る。或ひと云ふ、詩は宜しく変化すべし。月例の吟会の如き、其の変化する所、其の対する所の地と人と常に同じなり。花月雨雪の景も亦た毎年異ならず。況んや韻を分ちて字を限りて、以て其の思ひを拘束するをや。是の如くにして其の詩の変化せんことを求むるも亦た難からざらんや。余曰く、「是れ一隅の偏見にして、詩を知る者に非ざるなり。蓋し時運の変遷、人意の移易。日有りて同じからざる者活機動く処、雲行き水流る。声律嚴なりと雖も、未だ嘗て沛然として餘り有るに非ずんばあらず。故に韻を分ち字を限りて、以て其の思ひを専らにす。或は次ぎ或は畳ぬ。韻愈々窄ければ、則ち思ひ愈々精し。警句奇語、時有りて天来するは、偶然に非ざるなり。如し是を以て為に詩思を拘束すれば、是れ放言自暴せんのみ。豈に与に文字の妙を断ずるに足らんや。猗猗処吟稿は、概ね吟友と同一賦せし者なり。因りて引くに此の言を以てす。筠叟履。

○明治四十五年七月四日付筠軒宛君山書簡。

(図三) (21)

鐵軒跋文昨日到着

これも唯今加朱付郵候。



図三

御腹痛御輕快之由、

大慶之至候。大作及御

はかき拝見、一二加朱返上

御取捨可被候。不相変、日々

鬱陶敷、御切望、千萬

保攝。頓首。七月初四日

龜太郎

筠軒先生

○明治四十五年七月十五日付筠軒宛君山書簡

(図四) (12)

御手紙并御はかき拝見。兎角

不順之氣候二候處、御宿痾

如何二被爲渡候哉。御保攝專一二

存候。跋文稽留爲罪甚大。御査取

可被下候。此中入學試験採點中

多忙不可言。此より學校二出掛

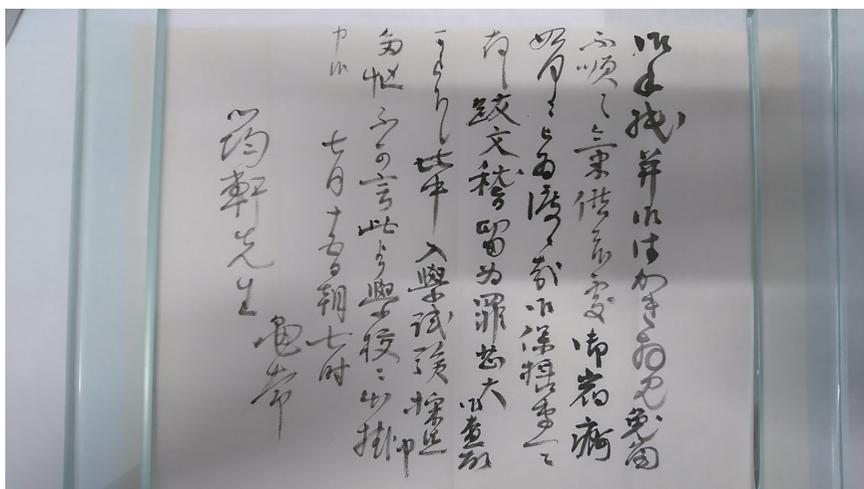
申候。七月十五日朝七時

龜太郎

筠軒先生

右の書簡に見える「跋文」に該当するものは、にわか刊本『筠軒詩鈔』中に見当たらないが、『猗々處吟稿』に見えるものでは、『詩

鈔』卷八の後に添えられた「書題畫六言三十韻後」があるいはそれ



図四

であるかも知れない。詩書画に傑出していた筠軒への君山の敬意が溢れ出る文章であって、かつ経学史学に造詣の深かった君山の、詩学もまた深甚でありしことが感得されるもので、これにも①、③に分けて一瞥を加える。

筠軒大須賀翁、長於家嚴一二歳。與我師成斎重野先生相善。學問該博。詩詞精絶。又妙乎六法。以嚮與予同僚故。往來太密。屬者示其近作六言題畫詩。韻目送至陌。事自春至冬。無慮三十首。皆刻骨鏤心之作。非漫然成者也。」①六言之詩所由來久矣。古詩我姑酌彼金罍。政事實裨益我。六月食鬱及奠諸句。蓋其濫觴。屈平山鬼國殤哀郢遠遊諸篇。及楚王虞兮之歌。漢皇大風之謡。去一兮字。則概成六言。然未爲正格。其有之。實始乎漢董仲舒。爾後作者間出。曹魏有文帝曹子建。馬晋有陸士衡。皆擅其長。及至李唐。王摩詰盧允言劉文房諸人。往往試之於體。然比諸君五七言甚少。張懿孫嘗贈六言於皇甫茂政。茂政裁七言酬之云。拙於事者繁而費。洪容齋集唐人絕句。所得七言七千五百首。五言二千五百首。而六言則不滿四十。蓋字少句局。音節促急。古人亦難乎措詞也。今翁所賦。韻極險。事極狹。而寄託深遠。神氣流動。無一雷同之語。無一艱澁之句。至其佳者。將駕古人而上之。雖曰刻骨鏤心非漫然成者。非筆力超絶一世。安能至乎。」②去年家嚴齡六十。予請詩文書畫於師友以爲壽。求至成齋先生。先生偶稱翁曰、地方達文藝者。筠軒一人耳。歸鄉之日。獻所獲於膝下。家嚴展觀至翁之筆。驚歎曰、東北豈有詩畫

雙絶如此人者耶。嗚呼可以知翁矣。明治癸卯三月中幹。出雲瀧川資言識於仙臺僑居。」③

これを版本に附された段落分けの括弧に従って、分けて訓訳してみる。

「筠軒大須賀翁は、家嚴より長ずること一二歳。我が師成斎重野先生と相ひ善し。學問該博にして、詩詞精絶。又た六法に妙なり。嚮ごろ予と同僚なるの故を以て、往來すること太はだ密なり。屬者（このごろ）其の近作の六言題畫詩を示す。韻目は送より陌に至り、事は春自り冬に至る。無慮三十首。皆な刻骨鏤心の作なり。漫然として成るに非ざる者なり。」①

瀧川の師匠が東京帝大教授でもあった重野成斎であることが知れる。この文章の末尾で、重野もまた筠軒の力量を認めていたことが示される。経学、史学に通暁するのみならず、詩詞にも深く、かつ画技にも長じていたということが「六法に妙なり」に示される。瀧川も詩学に深く、かつ作詩の心得があったということは、筠軒の連作三十首の韻目が去声の三十韻を去声一送韻から去声三十韻をすべて列挙していることをさりげなく指摘することに十分に示されている。仄音で押韻するのは容易ではなく、かつ去声の韻目をすべて使つての作詩が尋常な技量では決してなしえないことを言外に称揚するのである。次の一段で瀧川の詩学が存分に披瀝される。

「六言の詩、由来する所久し矣。古詩は、「我姑く彼の金罍を

酌む」、「政事は実に我を裨益す」、「六月鬱及蕝を食ふ」の諸句、蓋し其の濫觴ならん。屈平の「山鬼」・「國殤」・「哀郢」・「遠遊」の諸篇、及び楚王の「虞兮」の歌、漢皇の「大風」の謡より一の兮字を去れば、則ち概ね六言と成る。然れども未だ正格と為さず。其の之れ有るは、実に漢の董仲舒より始まる。爾後作者聞き出づ。曹魏に文帝曹子建有り。馬晋に陸士衡有り。皆其の長を擅にす。李唐の王摩詰・盧允言・劉文房の諸人に至るに及んで、往往にして之を体に試む。然れども諸れを五七言に比ぶれば甚はだ少し。張懿孫嘗て六言を皇甫茂政に贈るに、茂政七言を裁して之に酬ゆと云ふ。事に拙なる者、繁にして費す。洪容齋、唐人の絶句を集めて、得る所七言七千五百首、五言二千五百首、而して六言は、則ち四十に満たず。蓋し字少くして句局まり、音節促急すばならん。古人も亦た詞を描くことを難しとするなり。

今、翁の賦する所、韻極めて陰なり。事極めて狭し。而るに寄託深遠にして、神氣流動す。一の雷同の語無く、一の艱澁の句無し。其の佳なる者に至りては、將に古人を駕して之に上らんとす。刻骨鏤心にして漫然と成る者に非ずと雖も、筆力の一世を超絶するに非ずんば、安んぞ能く至らんや。」②

「彼姑酌金盞」は『詩経』周南「卷耳」の句、「六月食鬱及蕝」は『詩経』豳風「七月」の句で、四言を常とする『詩経』の各詩にあって、六言句が時に見えているのが六言詩の濫觴であるとす。それ

がさらに屈原の『楚辞』の諸篇「山鬼」「國殤」「哀郢」「遠遊」や楚の項羽や漢の高祖の詠に見える七言句から「兮」を除くと六言になるものがあって、それも古い時期のものだが、過渡期のものではっきりと六言詩として定着したものではない。漢の董仲舒を初発とし、六朝には、曹植、陸機がいて、唐では王維、盧綸、劉長卿の作があるが、極めて少ない。その後と同じく唐の皇甫冉が張継から寄せられた六言詩に七言詩で答えた逸事などを以て、この詩体が唐人にとつても難儀を極めたことをいう。その後唐詩の絶句の中にも五七言に比して六言が極めて少ないことを言うが、これは南宋の洪邁の『萬首唐人絶句』、『容齋隨筆』に依拠しての発言である。ここの瀧川の議論も概ね、和刻本もある隨筆詩話によるものである。うが、引用は行き届いた理解に基づいてなされていて、瀧川の持論とも見做せる。

その後「翁」との敬称を添えて筠軒の六言の題画詩三十首に論及し、再び去声という、属する文字が極めて少ない韻目ばかりを選んで、韻が「陰」であるをいう。四季の山水の景観を詠じるのだから、単調におち入りやすい題材の「狭」をいって、それなのに、流麗かつ深遠なる作ばかりであることを絶賛するのである。

「去年、家嚴齡六十なり。予詩文書画を師友に請うて以て寿を為す。成齋先生に求むるに至りて、先生偶々翁を称して曰く、地方にして文藝に達する者は、筠軒一人あるのみ。帰郷の日、獲る所を膝下に献ず。家嚴展観して翁の筆に至りて、驚歎して

曰く、東北に豈に詩画双絶此の如き人ある者なるか。嗚呼、以て翁を知る可し矣。明治癸卯三月中幹。出雲瀧川資言仙臺の僑居に識す。」③

筠軒は父瀧川奎之丞の還暦を祝って、詩文書画を知友に求め、恩師重野成斎の筠軒の学を讀える言と父がその詩書画を見て「三絶」とした逸事を添えて筆を擱く。

右の君山の一文の版本『筠軒詩鈔』の位置はその巻八、『猗猗處吟稿』二の直後にあるので、「跋文」と見做しうるが、内容といい、題といい、巻八の本文の中にある筠軒の連作「題自畫四時山水圖」連作三十首に対応するものである。この六言絶句三十首の鑑賞は、別席の話柄にすることとして、ここではその冒頭に冠せられた筠軒の詩引を書き下し文を添えて引くに止める。曰く、

詩之難作者、莫如六言。蓋増減一字、而適五適七者、非六言也。必如王網川花落家童未掃鳥啼山客猶眠而後妙。宜乎。古今推爲第一也。余不自揆。欲嗣遺韻於千載。試賦去聲三十韻。鵠之鶩虎之狗。愈知其難而自見其陋也。然心血所注。不忍覆醅。録以仰大方是正。

詩の作り難き者は、六言に如くは莫し。蓋し一字を増減すれば、而ち五に適ひ七に適ふ者は、六言に非るなり。必ず王網川の花落ちるも家童未だ掃はず。鳥啼くも山客猶ほ眠るがごとくにして而ち後に妙ならん。宜なるかな。古今推して第一と為すや、余自から揆らず。遺韻を千載に嗣がんと欲す。試みに去聲三十

韻を賦さんと欲す。鵠の鶩たる、虎の狗たる、愈々其の難くして自から其の陋を見るを知るなり。然れども心血の注ぐ所、覆醅たるに忍びず。録して以て大方の是正を仰ぐ。

注

(1) 福島理子氏「儒者の怪奇趣味」(和漢比較文学叢書『江戸小説と漢文学』汲古書院、一九九三)。

(2) 広瀬旭莊「和鳥子玉丑時咀」(『梅墩詩鈔』初編卷三)の冒頭句は「玉樓瘦、銀海澀」というものである。これは北宋、蘇軾「雪後書北台壁」第二首」と題する詩の「凍逢玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花」から撰取したものである。この詩については、宋の趙令時『候鯖録』卷一に「人不知其使事也。後移汝海、過金陵。見王荊公。論詩及此云、道家以て両肩爲玉樓、以目爲銀海。是使此否。坡笑之。退謂葉致遠曰、學荊公者、豈有此博學哉」とあることから、「玉樓」が肩、「銀海」が瞳を指す。ただし極めて特異な表現で、蘇軾以前には用例はなく、以後はすべて蘇軾を踏襲したものである。筠軒の「幽靈行」の19句「玉樓骨立ちて銀海眊し」は広瀬旭莊の「丑時咀」の冒頭句から撰取したと考えてよいであろう。勿論、蘇軾の詩語であることを筠軒は知っていたとしたい。

(3) 拙稿「安積良斎の長篇古詩「俠客行」について―旅の副産物―」、『国文学研究』第百九十二集(二〇〇〇・一〇)所掲。

(4) 注(3)に同じ。